地域課題の解決に向けた取組

十勝西部森林管理署

列状間伐による低コストへの取組と普及への課題

ここ十勝地域においても、人工林は成熟し本格的な利用期を迎えつつあります。

しかし、その一方では林業労働力の確保が課題になっています。

こうした中、十勝管内の森林管理(支)署と十勝総合振興局では、林政連絡会議を開催し、「低コストで安定的に木材を供給する」、「安全作業と省力化に資する」という観点から列状間伐の推進・普及に取り組んでいます。

十勝地域林政連絡会議

国有林では原則2回目間伐までは列状で実施することとしていますが、道有林では2回目間伐はほとんど定性で行われていました。

そこで、平成26年度には広尾町の国有林内において、高性能林業機械による列状間伐の作業システムと森林作業道作設に関する研修会を行ったところ、平成27年度には豊頃町の道有林において、2回目間伐を列状で行った現場で検討会が行われました。

道有林からは、列状間伐を実施した結果として、「かかり木の発生も少なく、予定よりも少ない日数で作業を終えた」「心配された風倒被害は見られなかった」などの報告があり、列状間伐が低コストや安全性の向上に資するものであることが確認できました。

しかし一方で、「林家の中には、列状間伐は将来残すべき木まで伐ってしまうと懐疑的な意見が根強く、普及は容易ではない」という意見も出されました。

道有林の列状間伐検討会

このことに関しては、実際に十勝のある指導林家が所有するカラマツ人工林を見学させていただく機会がありました。

現地は優良大径材生産を目標にしている立派な人工林で、4年～5年間隔7～8齢級まで間伐(定性)を実施し、収穫期には立木価格で1本1万円を目指し、きめ細かな管理が行われています。

こうした林家の方には列状間伐はなかなか理解していただけませんが、農業などの生業の合間に自分の山林を自家労力で手入れをするという経営形態と広大な森林を限られた予算の中で最良の効果が得られるよう管理する経営形態とでは、コストや効率に対する考え方に隔たりがあるのは仕方のないことかもしれません。

それぞれの経営があり、そのニーズも違うことを認識しつつ、それぞれに必要な情報や技術を提供できるよう私たちも研鑽を積んでいく必要があると感じています。

林家のカラマツ人工林

これまでの取り組みで、列状間伐のメリットなどについては道有林との間で認識を共有することができました。今後は再造林が増えていくことから、伐ったら植えて育てるという資源の循環利用をしっかり進めていくためにも、引き続き低コスト化・高効率化に取り組んでいきたいと考えており、一貫作業や低密度植栽など新たな課題にも挑戦しているところです。